The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞伊井春樹著『ゴードン・スミスの見た明治の日本日露戦争と大和魂』
Author(s)	坂井, 二三絵
Citation	語文. 2008, 90, p. 55-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69108
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹介

伊井春樹著『ゴードン・スミスの見た明治の日本　日露戦争と大和魂』

坂井　二三絵

一八五八年生まれのイギリス人、リチャード・ゴードン・スミスは、明治三十一（一八九八）年に初めて日本を訪れ、その後数度の帰国を挟みながら来日を重ね、大正九（一九二〇）年日本に没し、現在神戸の外国人墓地に眠っている。著者は十数年前に、大阪青山学園所蔵のスミスの日記八冊と昔話集五冊を発見、以来、本学大学院の演習でもスミスの日記を取り上げ、また独自に調査・分析を進めた。本書は、日露戦争に関する記事を中心に分析、これまであまり知られてこなかったスミスの足跡を明らかにし、文化史の中にその功績を位置づけたものだ。

幕末から明治にかけて多くの西洋人が日本を訪れ、この極東の小国を見出した驚きを手記に書き残している。四角の布を巻き付けた服装や開放的な家屋、床に座る習慣や人間がひく車。こうした西洋と異なる日本の生活様式に対するエキゾチズム、あるいは違和感は、それらの手記に多く見られる。博物学者であるスミスも同様で、日記には日本人の書いた手紙からおみくじ、箸袋まで、様々なものを貼り付けている。だが著者は、そこからさらに進んで、日本人の精神性に目を向けたスミスの一面に光をあてている。

中でも、日露戦争における日本人の振る舞いは、英人スミスが西洋人との違いを最も実感するところだ。スミスの日記やそこに付された日露両国の兵士の手紙の紹介は、読者にもその違いを実感させる。スミスが特に驚くのは、兵士の出発に際して誰も悲しみを露わにせず厳粛であることや、兵士たちが皆おとなしく、酒に酔ったり騒ぐものさえないことである。こうした記事を追うことで、子供から老人まで全てが日本の一員として秩序を守る様子に心をうたれたスミスが、やがて大国ロシアからの勝因は国民の団結なのだという結論に至るまでの一連の流れが見えてくる。

しかし一方で、開戦前から戦争を熱望する日本人の態度にスミスは違和感を覚えている。また、「万歳」の言葉で見送られる兵士や、死という帰還を「誇り」と喜ばねばならない家族の悲しみを読みとる。「大和魂」の裏にある兵士やその家族の個々の悲しみに同情を寄せる暖かな人柄と、彼らの傷跡を埋めるため行われた多大な支援活動の紹介は、本書の大きな読みどころといえる。

多彩な内容を持つ日記の中から日露戦争に関する記事が抽出されたことで、帝国主義時代の平和主義者、スミスの人物像とともに、現在にも続く日本人の国民性が浮き彫りになってくる。スミスが感心もし、一方で強い違和感も覚えた、個を殺し、集団として唯一の「正」へ突き進む日本人は、以降第一次、そして第二次世界大戦の熱狂へ向かうことになる。スミスの日記を繙くことは、現代に伝わらない明治の日本を知るとともに、私たちの自覚しない日本人の本質に改めて目を向けることにもなるだろう。

（角川学芸出版、二〇〇七年七月、二四六頁、一、六八〇円）